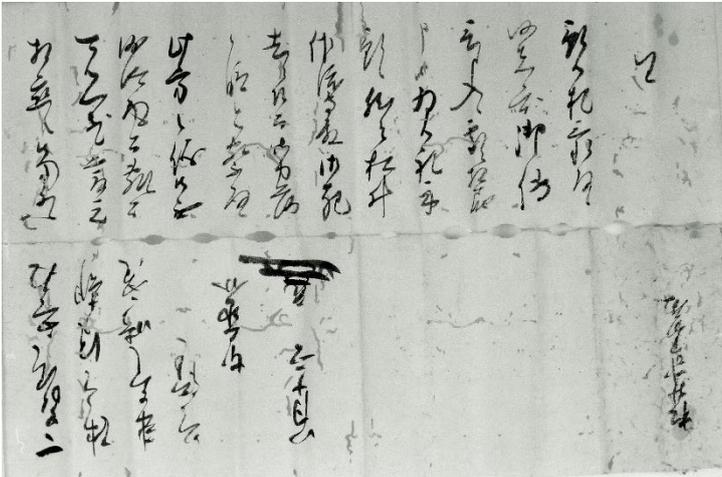


死を伝えることば 松井家文書より

① 本多正純書状 松井式部少（興長）宛 江戸時代初期 慶長17年（1612）8月12日



松井康之の死をいたむ

この書状は、徳川幕府の老中本多正純が、松井興長にあてたお悔やみ状です。亡くなったのは、興長の父である松井康之。康之は、豊前小倉藩主細川家の家老でしたが、病気のため、慶長17年1月23日、小倉城下の自宅で亡くなりました。享年63歳でした。書中には、「御死去」、「御力落」というお悔やみの言葉が記されています。康之が、幕府老中からも死を惜しまれる存在だったことがわかります。

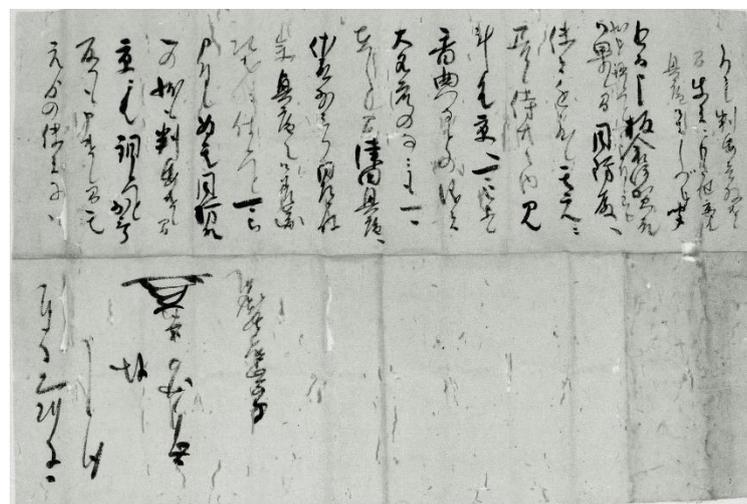
② 細川綱利自筆書状 長岡佐渡（松井直之）宛 江戸時代前期 元禄3年（1690）6月5日



細川行孝の死をいたむ

熊本藩主の細川綱利が家老の松井直之にあてた書状で、細川行孝の死を伝えています。細川行孝は、熊本藩の支藩である宇土藩の藩主で、綱利の親戚にあたります。行孝の死を残念に思った綱利は、その心情を「苦々しく言葉もない」という一文で表わしています。

③ 細川忠利書状 長岡式部少輔（松井興長）宛 江戸時代前期 寛永元年（1624）5月4日



板倉勝重の死をいたむ

豊前小倉藩主の細川忠利が、家老の松井興長にあてた書状で、板倉勝重の死を伝えています。板倉勝重は、京都所司代として活躍した幕府の官僚で、西国大名に影響力をもちました。忠利は、お悔やみの使者を京都に派遣するよう命じるとともに、香典については他の大名と同程度にしたいので、津田興庵（幕臣）の指示を受けるよう命じています。

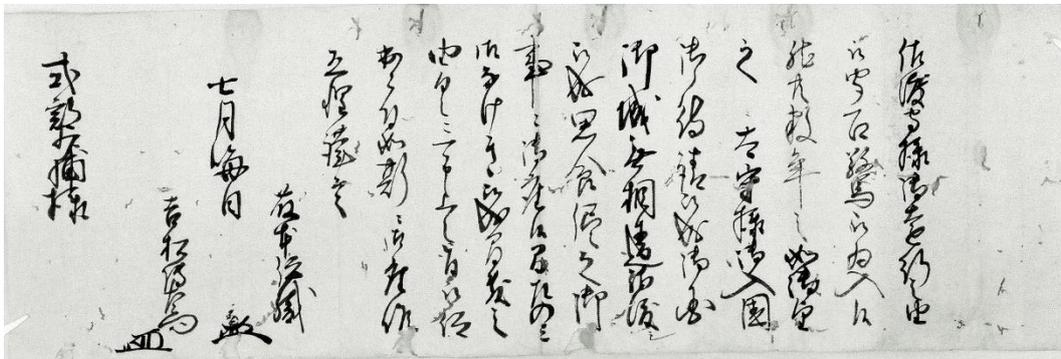
④ 細川綱利書状 長岡佐渡守（松井興長）ほか3名宛 江戸時代前期 万治元年（1657）1月28日



米田是季の死をいたむ

熊本藩主の細川綱利が、松井興長ら家老にあてた書状で、家老米田是季の死を受け書かれたもの。米田是季は、興長に次ぐ老臣で、73歳で病死するまで30年あまり、家老として細川家を支えました。綱利は、是季の死を「是非ない」という言葉で悼んでいます。

⑤ 吉松傳左衛門・藤本伊織連署状 式部少輔（松井寄之）宛 江戸時代前期 寛文元年（1661）7月30日



松井興長の死をいたむ

熊本藩主細川綱利に近侍する吉松・藤本が、松井寄之にあてたお悔やみ状です。亡くなったのは、寄之の父である松井興長。興長は、80歳で亡くなるまで50年間、細川家の家老をつとめました。この書状は、藩主綱利の言葉を伝えるため書かれたものです。書中には、父を失った寄之への慰めの言葉が記されています。

⑥ 細川綱利書状 長岡佐渡（松井直之）宛 江戸時代前期 延宝3年（1675）5月2日



山名十左衛門妻女の死をいたむ

熊本藩主の細川綱利が、家老松井直之にあてたお悔やみ状です。亡くなったのは、直之の妹国。国は、20歳のとき細川家重臣の山名十左衛門と結婚しますが、それから3年後、23歳の若さで亡くなりました。早すぎる死へのやるせない思いを綱利は、「苦々しい」という言葉で表現しています。

※写真の古文書はいずれも(財)松井文庫所蔵